



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

祖父の思ひ出を巡って

―憲法改正は「自力」でなし得ることである―

寶邊 矢太郎

祖父と五右衛門風呂に入るのが
楽しみであった。よく日露戦争の
話をしてくれた。祖父が青年の頃、
日本海海戦の砲声が聞えたといふ。
東郷平八郎大將率ゐる我が連合艦
隊とロシアのバルチック艦隊との
日露戦争中の最大規模の艦隊決戦
である。敵の進路を遮るため、敵
前大回頭の丁字戦法を決行。その
とき艦隊の動きが止まるか見え
る時間帯に露軍は喜び、一斉に射
撃するが中らない。「天子様が助
けてくれたんぢや」と祖父は涙ぐ
む。連合艦隊は辛抱の極限を待ち
一斉の砲火を浴びせ、練度に圧倒
的に勝る我軍は完勝に近い勝利を
得たのである。弟が学校で作った
地球儀でバルト海のリバウ港から
ここをかう廻って半年かけてやつ
てきたことも知った。軍歌にもあ
るやうに「健気なれ」だ。ロシア
に度々占領されたフィンランドは

バルチック艦隊を沈痛な面持ちで
見送っただらうが、もう本当に
帰ってこないことを知り、それは
狂気乱舞したであらう。今に「東
郷通り」の標識があるといふ。
乃木さんの二百三高地の話にな
るとまた涙声である。乃木さんの
七言絶句の一つ「爾靈山の險豈攀
じ難からんや(後略)」も教はった。
山上の露軍のトーチカから重火器
の攻撃で我が軍の戦闘者は空しく
夥しくたふれてゆく。「鉄血山を
覆ひて山形改まる」と絶句は続く
が、戦死体が幾重にも重なり、山
形が改まるとは。「露助奴が」と
祖父は呟く。露助とはロシア人を
嘲つていふ語である。いくら歳月
を経て雨がふると、山の地肌か
ら人間の血が滲み出るとまてい
れる激戦の地であった。

下関に住した作家、故古川薫氏
は司馬遼太郎氏と関門海峡沿ひの
割烹旅館で会食した時のこと。「長
州がお嫌ひなやうですね」「ええ、
嫌ひです」と、率直な返事だった
らしい。司馬氏の『殉死』が版を
重ね、乃木愚将論が行き渡った頃、
乃木希典に関する記述の誤謬を糾
さんと古川氏は渾身の作『斜陽に
立つ』を世に問うた。戊辰戦争か
ら運命の日露戦争、乃木の自死の
日まで、乃木と児玉源太郎両将の
人生の軌跡と友情を描いてゐる。
大東亜戦争終戦時、ソ連は日本
との条約を破り、千島、樺太、満
洲を踏みつぶした。戦車で轢き殺
し、機銃で人を撃つ。あの国はど
れほど残酷で冷酷であるのか。人
の命を何とも思はない。町を壊す
ことも何とも思はない。今のウク
ライナを見れば、国名が変つても
何も変つてゐない。そしてウクラ
イナ軍民の死闘は、生存は至高の
価値か、と我らに突きつける。

「日本は、とりわけ善人の多い
国である。せまい島国の中で一言
語、一族、一国家という家族的
国家を数千年にわたつて維持して
きたおかげで、国際社会の狡猾さ
についてはほとんど無知といえ
る」とは、四五年前に日本人を
震撼させた恐怖の世界戦略を説か
れた故倉前盛通氏(重細亜大学教授)
の著作『悪の論理』の一節である。
今読み返しても色褪せぬ。白人と
非白人、キリスト教徒と非キリス
ト教徒、マルクス主義者と非マル
クス主義者との距離はそれぞれ無
限である、との指摘には眼が眩む。
戦前は東亜諸国や濠洲は英米仏
蘭の植民地であった。現地人を奴
隸化し、搾取することに何らの良
心の呵責すら感じてはゐまい。
米国も先住民を殺戮し、黒人を
買ひ、西へ西へと侵略し、先の大
戦では中国と気脈を通じ、ソ連の
参戦を求め、東京大空襲で一夜に
十万人を焼き殺した。各地の空襲
を入れれば数十万人で、とどめは
原爆で三十万人の命を焦熱、爆風
放射線で奪つた。非白人なら何を
してもよいらしい。
忌々しいが、その米国が日本を
統治した御蔭でソ連の北海道北半
分をよこせは拒否され、七十七年
間、日本が無事でゐられたのも、
核をもつ米軍が日本に駐留したか
らで、不戦を誓つた憲法があつた
からでは断じて無い。「平和を愛
する諸国民の」情けに縋つて「安
全と生存を保持」する事にしたと、
中外に宣言した。こんな恥づかし
い文章があるか。改正は自力でな
し得ることである。故安倍晋三元
首相の悲願でもあつた。
(元山口県立高等学校教諭)